

何が人を幸福にし何が人を不幸にするか

—— 国際比較調査の自由記述分析 ——

大 山 泰 宏

京都大学

What makes people happy and what makes them unhappy? :

A cross-cultural qualitative study on the sense of happiness

Yasuhiro OYAMA

Kyoto University

This study involves cross-cultural qualitative research on subjective well-being conducted within the Kyoto University Global COE project. Over 8,000 respondents from 13 countries (seven languages) were requested to complete a sentence complementation test (SCT) via the Internet. The questions pertained to what makes them happy, what makes them unhappy, and how they define happiness. The collected data were analyzed through text mining and category coding methods. The results from seven countries were discussed in depth. The component factors of the sense of happiness are different from those of the sense of unhappiness, and the definition of happiness does not always correspond with the sense of happiness. Some findings concerning interdependent self-construal in East Asian cultures were also discussed. For instance, the Japanese sense of happiness is strongly affected by the relationship with the generalized others, and participating in an activity with others is considered more important than merely being together. The overview of the cross-cultural differences highlights the need for a more comprehensive framework beyond the dichotomy such as European and North American versus East Asian cultures.

Key words : sense of happiness, definition of happiness, cross-cultural study, interdependent self-construal, generalized others

キーワード：幸福の感覚、幸福の定義、文化比較研究、相互依存の自己感、一般化された他者

ングして分析した結果を報告する。

は じ め に

調査の目的と概要

本稿は、京都大学グローバル COE「心が活きる教育のための国際的拠点」(平成 19 年～23 年度)でおこなわれた「幸福度の国際比較研究」における自由記述部分の質的分析の報告である。重複を避けるために、「幸福度の国際比較研究」調査全体の概要や手続きに関しては、子安ほかの論文「幸福度の国際比較調査(数量的分析)」に譲り、本稿では自由記述部分に焦点を絞り、日本を中心として詳細な国際比較を行うために、13 カ国 7 言語、合計 8,000 人以上から集められたデータのうち、7 カ国 5 言語、合計 612 人をサンプリ

自由記述を設けた意図

幸福度(happiness, well-being)の比較文化的な研究では、幸福度を行動経済学的な観点から論じるにせよ、心理学的で主観的なものとして定義するにせよ、数量的研究によっておこなわれることが多い。すなわち、幸福度を構成する諸要素として定義された行動や価値観を測る尺度への回答傾向から、幸福度の度合い、幸福度に関連する諸変数の構造が議論されてきた。今回の本拠地の「幸福度の国際比較研究」においても同様に、多

角的で包括的な数量的調査がなされている。

こうした従来の方法に加え、今回の国際比較研究では、以下のような意図により、回答に自由記述部分を設けた。第一の意図は、数量的調査の分析を補完することである。それぞれの国から得られた数量的データの分析結果を検討していく際に、自由記述を参照することで、数値の解釈をさらなる根拠をもって深く行えることが期待できるであろう。また、数量的結果だけからは見えてこない各国の特徴を、より詳細で具体的に知ることが期待できよう。第二の意図は、今回の調査における幸福感の構造的仮説である「有能感、生命感、達成感」という3つのキーワードのフレームワークに収まりきらない何かを拾いあげることである。これら3つのキーワードが提供するフレームワークでは、幸福感とは、「環境に働きかけ変えていくことができること（有能感）」、「他者や世界とつながり支えられること（生命感）」、そして「これら2つに支えられて何かを成し遂げることができるということ（達成感）」として定義されている。ここで捉えられる幸福感は、その網の目に捉えられるものに限定されてしまう可能性がある。これに対して、質問が構造化されない自由記述では、このフレームワークに左右されないデータが得られることが期待できる。そこで得られるデータは仮説生成的な性格をもつのであり、数量的分析に比べて厳密性は劣るかもしれないが、幸福感の心理学的探究において示唆するところも大きいであろう。

自由記述の質問項目の作成

【SCT を用いる意義】

質問紙調査の自由記述では、得られる回答が十分に多様性をもちつつも、ある程度一定範囲に収斂したものであることが必要である。あまりにも回答の自由度が高い曖昧な質問では、回答の長さや精確さなどが統制されえず、無回答も多く見られてしまう。これに対して、あまりにも構造化されすぎた質問では、特定のフレームワークに従った回答が多くなり、多様性に乏しくなってしまう。自由記述を得るための質問は、このトレードオフのあいだに適切なポイントを定めることが必要である。

その要請に応える方法として、心理検査の投映

法の一種として用いられている SCT (Sentence Completion Test, 文章完成法) がある。SCT とは、「私にとって母は」とか「私の顔は」などの先行刺激文に続けて、被検査者が文章を書き加え完成させるものである。「幸福について思うことを書いてください」等の自由度の高い質問項目に比べて、回答はある程度まとまったものとなりつつ、十分に多様性があることが期待できる。また、13 カ国 7 言語の調査であるため、分析の際に必要な日本語への翻訳の労を考えると、得られる回答は短文であることが望ましい。こうしたいくつかの条件を満たすものとして SCT 方式を採用することとした。

【先行刺激文の構成と特徴】

先行刺激文は、本調査研究チームでの討議を重ね、以下のような3つの質問とした。なお、質問文の中の「～～」および「…」の部分が、調査協力者が文章を補完し完成させる回答部分である。以下、7 言語のうち日本語と英語のみを示す。

・ Q1：私は～～とき幸福を感じる。(I feel happy when)

この質問は、幸福を感じる状況や出来事、要因について尋ねるものである。状況と対応した比較的素朴で単純な、日常感覚における「幸福感」を尋ねるものであるといえよう。

・ Q2：私は～～とき不幸を感じる。(I feel unhappy when)

この質問は、不幸を感じる状況や出来事、要因について尋ねるものである。ここで幸福感と分けて「不幸感」について尋ねるのは、以下のような理由による。すなわち、幸福感を規定する要因と不幸感を規定する要因は、必ずしも同じものとは限らないことが想定しうるからである。幸福感をもたらす要因の欠如が、そのまま不幸感をもたらすわけではないであろう。あるいは、幸福感をもたらす要因が存在しつつも、不幸感をもたらす要因が加わることで、総合的には不幸を感じることもありうる。あるいはまた、不幸感をもたらす要因がないということが、幸福感の条件として重要かもしれない。このように、幸福感と不幸感を構成する要因のあいだには、様々な関連性が論理的に想定しうる。従って、幸福感の要因と不幸感の要因を、当面独立のものと仮定して分けて尋ね、両者の関係をみることで、より緻密に幸福感の構

造的要因を捉えることを意図した。

- ・ Q3: 私にとって幸福とは～～である。(For me, happiness is.....)

この質問は、個人の幸福に関する定義について尋ねるものである。Q1とQ2はいずれも、比較的断片的で全体として意味組織化されていない、幸福および不幸に影響する要因を具体的に尋ねたものであった。これに対してQ3では、回答者の人生観、価値観、世界観、信念、宗教などに関連しつつ、より組織化され抽象化された、個人の意味構成に位置づけられた幸福感に関する記述を得るためのものである。すなわち「幸福観」に関する質問であるといえる。

ここで今回のSCTによって得られる回答の特性や制約について、あらかじめ述べておきたい。幸福感とはDiener(2000)が述べるように、個人の人生に対する包括的な評価であり、そこには多くの要因が介在し、それらの要因は複雑に関連している。リッカート法による定量的な調査では、そうした複数の要因に対して、並列的・包括的に測定することが可能である。これに対して、今回用いるSCTのQ1およびQ2で得られる回答では、幸福感に影響する複数の要因の中から一つ(もしくはごく少数)を強制的に選択させることになる。したがって、その回答の全体的分布は、個人内の幸福感の諸要因の分布というよりも、個人が第一に挙げる要因の分布と考えられることに留意したい。

調査の実施

Q1「私は～～とき幸福を感じる。(I feel happy when...)」, Q2「私は～～とき不幸を感じる。(I feel unhappy when...)」, Q3「私にとって幸福とは～～である。(For me, happiness is.....)」の3種類の質問項目(先行刺激文)は、数量的調査の項目と同じく、日本語と英語の原文から、スペイン語、ポルトガル語、ドイツ語、中国語、韓国語に翻訳したものが作成され、13カ国を対象にインターネット上で回答が求められた。これらの自由記述項目は、数量的調査の項目の後に配置され、調査の最後の3つの質問を構成していた。質問に対する回答には、字数制限は設けられていなかった。得られた回答のうち無記入であるものはほとんどなく、いずれの国も99%以上の回答

率であった。各国の回答者数、男女比、年齢層等の属性情報に関しては、子安ほかの論文を参照されたい。

結果と分析

データの事前処理(分析対象データの抽出と翻訳)

日本語以外の言語による回答は、データ事前処理として日本語に翻訳する必要があった。翻訳にかかる労力と十分に信頼性のあるデータが得られるサンプル数との兼ね合いを考慮して、各国で100名以上のサンプルが得られるように、各年齢群(18～25歳, 40～49歳, 60歳以上)それぞれから、男性17名、女性17名、合計102名をランダムに抽出し分析対象とした。これは各国の調査データの5分の1から6分の1にあたる。

抽出された被調査者の回答は、一文ずつ日本語に翻訳された。英語、ドイツ語、スペイン語に関しては、それらの言語に習熟した日本語話者が、韓国語、中国語に関しては、日本語に習熟したそれぞれの言語を母国語とする者が翻訳をおこなった。なお、ポルトガル語(ブラジル)に関しては、翻訳可能な人材が得られなかったため、2011年11月現在、翻訳はおこなっていない。また、韓国語のQ3も未完了であるので、今回の分析からは省いてある。

分析方法の選定

得られた回答の特徴を吟味して、適切な質的分析の手法を選択した。Q1とQ2に対してはテキストマイニングを用いた分析が、Q3に対してはカテゴリーコーディングを用いた分析が適当であると判断された。理由は以下のとおりである。

Q1とQ2の回答は、幸福もしくは不幸と感じる状況に関する具体的な記述である。それらにはまとまった主張や意味よりも、複数の具体的な要因や状況が並列あるいは組み合わせられているものが多く見られた。たとえば、「私は 友人と美しい景色を見ながらおいしいものを食べる ときに幸福を感じる」という回答には、友人との共在(他者との関係)、美しい景色を見る(自然環境に触れる)、おいしいものを食べる(食事あるいは自分の好きなことをする)という3つの要素が含ま

れている。あるいは、「私は 家族が健康で自分がやりがいのある仕事をしているとき に幸福を感じる」という回答では、二つ以上の状況が並列されている。このように Q1 と Q2 のそれぞれの回答は、全体として一義的に意味が決定されるというよりも、そこに含まれている複数の要因を考慮して、それらの併存（共起性）や関係性を考慮するほうが適切であると見なされた。このような理由から、テキストマイニングが分析方法として選択された。

他方、Q3「私にとって幸福とは～～である」に対する回答は、「人と人とのつながり」「心が豊かなこと」といった、幸福感をもたらす要因を記述したものの他、「不幸のないこと」「現時点では遠いもの」といった幸福の抽象的属性を記述したものや、「日々を大切に生きること」といった態度や信念を表すものなどが見られた。これらの回答は、まとまった一義的な意味をもつと同時に、その抽象度や性質に多様性があるため、テキストマイニングの過程での単語抽出作業を経ると、回答の意味内容が損なわれる危険性が大きかった。また、Q1 および Q2 と比較すると、ひとつの回答内に複数の要素が含まれることが少なく、要因の共起性はそれほど考慮する必要がなかった。従って、回答文の意味内容を判断したカテゴリコーディングを、分析方法として採用した。

幸福感および不幸福感の要因の分析

【テキストマイニングによる分析の手続き】

テキストマイニングによる分析は、フリーソフトウェア KH Coder¹⁾ を使用しておこなわれた。（以下、自由記述の回答のことをテキストもしくはテキストデータと呼ぶ。）

1. 語の抽出

テキストデータは誤字脱字を訂正した後、形態素解析を行い、抽出された単語を各品詞に分類した。単語の出現頻度の下限は設けず、1 回でも出現した語であれば後の分析に含めた。

2. コーディング・ワードの生成

抽出された語は、同じ意味の異なる表現や概念的に類似したもの等をまとめて、コーディング・ワードを生成した。国どうしの比較を行うため、コーディング・ワードは原則としてすべての国で共通のものとなることをめざしたが、それぞれの国の社会・文化的な事情や言語的特徴のために、各国に固有のものを設けた場合もあった。コーディング・ルール（抽出された語をコーディング・ワードにまとめていく際のルール）に関しても、できるだけすべての国に共通する包括的なものとなることをめざしたが、言語的特徴や慣用句などを考慮して、国ごとに多少の調整をおこなった。コーディング・ルール適用の結果生成されるコーディング・ワードと、それに含まれるテキストの原文とが適切に対応しているかどうかを、筆者と KH Coder の使用に習熟した者 1 名とで協議しつつ検討を繰り返し、コーディング・ルールがより適切で包括的なものとなるようにした。以上のような手続きのもとで作成されたコーディング・ワードおよびコーディング・ルールを表 1 と表 2 に示した。

なお、コーディングに際して、この調査全体の概念的枠組である「有能感」と「達成感」に関して別々のコーディングをおこなうよう試みたが、Q1「幸福に感じるとき」に対する回答では、両者を区別することは困難であった。というのも、たとえば「何事もうまくいっているとき」「思うように物事がいったとき」という記述は、有能感とも達成感ともとれる。このように幸福に感じている状況では、両者は明確には区別されていない。したがって、「有能感・達成感」というコーディング・ワードを与えた。しかしながら、Q2「不幸に感じるとき」では、その原因（状況）を、自己の無能力さ（有能感の欠如）に帰属させているのか、結果的に達成できなかったこと（達成感の欠如）によるものとしているかは、区別されて記述されていた。したがって、表 2 に示すように、「達成感の欠如」と「無力感」という、別々のコーディング・ワードを設けた。なお、「生命感」に対応するコーディング・ワードは「一緒にいる」「家族」「重要な他者」「好きなことをする」など、複数のものに分かれている。

1) 立命館大学産業社会学部・樋口耕一氏製作によるフリーソフトウェア。http://khc.sourceforge.net/上で配布されている)

表1 「幸福を感じる時」コーディング・ルール

コーディング・ワード	コーディング・ルールの説明	含まれる単語例
家族	同居している人、動物。別居している血縁者	家族、団欒、妻、夫、ペット、両親、母親、孫、家庭、子ども、実家、家、主人、娘、こども
重要な他者	親密な関係にある他者、特別な意味をもつ他者	友達、友人、恋人、大切な人、好きな人、身近な人、彼女
抽象化された他者	特定の関係性や特定の人物が示されない他者	人、みんな、誰か、周囲の人、周り、誰も、皆
一緒にいる	特定の活動は明示されず、共にいることが重視されているもの	一緒に、関わる、交流、囲む
一人である	一人であることが重視されているもの	一人で、自分だけで
良好な人間関係	他者との良好な人間関係、他者からの肯定的評価	ワイワイ、盛り上がる、良好、円満、談笑、優しい、感謝、愛す、もらう、認められる、必要とされる、楽しい
好きなこと、自由	特定の活動が明示され、その活動が回答者にとって好ましいもの	遊ぶ、おしゃべり、会話、話す、時間、好きなこと、自由、したいように、休み、趣味、遊ぶ、ゲーム、寝る、ぶらぶら、何もせず、ほっこり、のんびり、ゆったり、食べる、酒
幸福な感情	幸福感に関連する感情状態	笑顔、笑う、嬉しい、感動、すっきり、満足、心が豊か、楽しい、幸せ、高揚、満ちた、気分
有能感・達成感	何かを成し遂げたり、そのために努力をしたりすること	やり遂げる、達成、成果、解決、成功、充実、すべきこと、実現、一生懸命、創造、思うように、努力、狙い、結果、思う通り、叶う、成長、頑張れる、発見
不幸が無い	不幸や心配事、悩みなどが無いこと	悩み、心配、問題、後悔、ストレス（以上、否定語を伴う）、無事、平穩、元気、健康、平凡、普通、穏やか、安定、平和、熟睡
経済的充足	経済に関すること	大金、収入、経済、お金、給料
自然	自然に関すること	自然、空、陽だまり、庭、植物、空、虹

表2 「不幸を感じる時」コーディング・ルール

コーディング・ワード	コーディング・ワードの説明	含まれる単語の例
家族	同居している人、動物。別居している血縁者	家族、団欒、妻、夫、ペット、両親、母親、孫、家庭、子ども、実家、家、主人、娘
重要な他者	親密な関係にある他者、特別な意味をもつ他者	友達、友人、恋人、大切な人、好きな人、身近な人、彼女
抽象化された他者	特定の関係性や特定の人物が示されない他者	人、みんな、誰か、周囲の人、周り、誰も、皆
仕事	仕事や勉強、義務的におこなうもの	仕事、職場、やりたくないこと、課題、上司、アルバイト、会社、レポート、学校、通勤、実験、勉強、実習、しなければならない
人間関係	悪い人間関係、他者からの否定的評価	うまくいかない、仲たがひ、ののしる、裏切る、はめる、理不尽、ないがしろ、悪意、軽蔑、嫌う、無視、誤解、身勝手、傷つける、なじめない、諍い、最低、喧嘩、見放す、差別、否定、拒否、いがみあい
達成感の欠如	自分が行うことが達成できない、結果が出ない（アウトカムの重視）	意味、成果、やる気、目標、報う、結果、やりがい、実行、頑張れる、達成、することが、欲しい（以上、否定表現を伴う）、失敗、裏目、失敗、挫折、しくじり
不幸な感情	否定的な感情を感じている状態	気がふさぐ、悲しい、苦痛、退屈、怒り、恐れ
不幸な出来事	自分や他者に不幸な出来事が起きること	病気になる、怪我をする、苦しむ、ひどいめにあう
無力感	自分の有能性が不足するためにうまくいかない（能力の重視）	思うように、思ったように、考え通り、自分の力（以上、否定表現を伴う）、何もできない、力不足、無力、非力、うまくいかない、困難、八方塞
自由の欠如	自由・自律的になれない、あるいはその時間がない	自由、自分の時間、したいように（以上、否定表現を伴う）、選べない、制約、時間がない、束縛、強制、不自由、嫌なこと、ねばならない
孤独	他者との関係性が存在しない、あるいは剥奪されている	誰も、誰にも、友達、仲間、付き合える人（以上、否定表現を伴う）、孤独、一人ぼっち、愛されない、解ってもらえない、寂しい
喪失、老い	健康や若さ体力を失う、あるいは他者を失う	別れる、亡くす、死、訃報、失う、年、老い、鏡
経済的問題	経済的な困窮、圧迫など	お金、金欠、貧しい、貯金、余裕、ローン、家計、年収

3. 分析対象国の選定

本論では、日本、韓国、米国、メキシコ、スペイン、英国、ドイツの7カ国を分析対象として選択し、国際比較をおこなった。

韓国を選定したのは、数量的分析の結果で日本と回答傾向が似ていたこと、日本と同じく多くの側面において他国より幸福感が低いことである。このように、日本と韓国は計量的観点からは共通性が高いが、自由記述の回答からみたときにはどうであるかを確認するためである。米国を選定したのは、これまで日米の文化間比較の先行研究が多く存在し、データの解釈をおこなう際の基準となると考えられたからである。メキシコを選定したのは、数量的分析においては、この国はあらゆる側面で日本とは対極的に幸福感が高いという結果になっていたからである。スペイン、英国、ドイツの各国に関しては、数量的分析結果からは特に目をひく特徴があったわけではない。しかし、多様性をもつ欧州各国のデータを加えることで、幸福/不幸を規定する社会文化的な要因を踏まえた解釈が、より多面的に行なえることが期待できよう。さらには、数量的分析ではあまり特徴がなくとも、自由記述の質的分析では重要な知見が得られる可能性もあると考えられたためである。

コーディング・ワードの分析と解釈

以上のように選定した分析対象国のデータから得られたコーディング・ワードを、「幸福を感じるとき」「不幸を感じるとき」別に上位7位²⁾までを示したのが、表3、表4である。

・Q1「幸福を感じるとき」

表3に示すように、「幸福を感じるとき」は、全般的にみて「家族」「一緒にいる」「友人」などの、つながりや関係性（本調査のフレームワークでは「生命感」にかかわるもの）を表すものが、各国とも共通して上位を占めていた。とりわけ、米国、メキシコ、スペイン、英国では、「一緒にいる」というコーディング・ワードが全回答の4割程度に出現しており、他者と共在するというこ

とが重要な意味をもっていることがわかる。これに対して、日本と韓国では、「一緒にいる」ことは、全回答のうち15%程度の出現であり、それよりも上位に「好きなことをする」というコーディング・ワードが位置していた。これは、「おしゃべりをする」「旅行する」「買い物をする」などの活動を伴うものである。後の共起ネットワークの分析でも記すが、自由記述のテキスト原文を確認すると、日本と韓国において「好きなことをする」というコーディング・ワードは、「家族」や「重要な他者」と共起することが多く、「友人とおしゃべりをしている」「家族と食事をしている」などの活動を共有していることが重視されていることがわかる。これに対して、「一緒にいる」ことが上位に位置する米国、メキシコ、スペイン、英国では、「友人といっしょにいる」「家族といっしょにいる」という他者との共在そのものを重視する記述が多かった。

「達成感」に着目するならば、メキシコ（33.6%）とドイツ（32.0%）が、他国より10%以上多くなっていた。特にドイツの場合、「達成感」が幸福を感じる要因としてもっとも多く挙げられていた。韓国、米国、英国では、「達成感」は20%程度である。日本では「達成感」の出現頻度は、8位（11.4%）と低くなっていた。

日本では、「抽象化された他者」（3位、17.4%）、「良好な人間関係」（4位、16.7%）がコーディング・ワードの出現頻度上位に挙がっているのが特徴的であり、かつ、これら2つのキーワードは共起することが多かった。すなわち、身近な重要な他者といった特定の他者ではなく、一般化された他者との関係が円滑で良好であることが重視されていることがわかる。

・Q2「不幸を感じるとき」

表4に示すように不幸感の規定要因としては、7カ国のうち日本以外の6カ国において、上位2位までに「達成感の欠如」が入っていた。他者との共在が幸福感のために重要であった米国、メキシコ、英国においても、不幸感の規定要因としてもっとも多く挙げられていたのは、「孤独」ではなく「達成感の欠如」であった。これに対してスペインでは、「達成感の欠如」よりも「孤独」のほうが、多く挙げられていた。日本では、「達成感

2) 頻出コーディング・ワードの8位以下は、出現頻度がきわめて少なく、また国によっては7位までで収束するところもあったため、7位までを記した。

表3 「幸福を感じる時」頻出コーディング・ワード (上位7位)

順位	日本	韓国	米国	国名 メキシコ	スペイン	英国	ドイツ
1	家族 25.0%	家族 24.4%	一緒にいる 38.9%	一緒にいる 37.4%	一緒にいる 45.3%	重要な他者 48.7%	有能感・達成感 32.0%
2	好きなことをする, 自由 18.2%	有能感・達成感 23.6%	重要な他者 31.5%	家族 35.5%	好きなことをする, 自由 34.9%	家族 26.1%	家族 26.8%
3	抽象化された他者 17.4%	好きなことをする, 自由 21.1%	好きなことをする, 自由 25.9%	有能感・達成感 33.6%	重要な他者 26.4%	好きなことをする 21.7%	一緒にいる 10.3%
4	良好な人間関係 16.7%	幸福な感情 14.6%	有能感・達成感 22.2%	重要な他者 17.8%	家族 16.0%	達成感, 19.1%	幸福な感情 9.3%
5	重要な他者 13.6%	一緒にいる 14.6%	家族 14.8%	幸福な感情 13.1%	有能感・達成感 14.2%	幸福な感情 14.8%	不幸がない 9.3%
6	一緒にいる 12.9%	仕事 7.3%	幸福な感情 5.6%	好きなことをする 9.4%	良好な人間関係 5.7%	良好な人間関係 6.1%	健康 8.3%
7	不幸が無い 12.1%	健康 7.3%	幸せな出来事 2.8%	一人である 2.8%	調和 2.8%	抽象化された他者 5.2%	抽象化された他者 7.2%

注) 各コーディング・ワードの百分率は、各国の全回答数の中での出現率を示す

表4 「不幸を感じる時」頻出コーディング・ワード (上位7位)

順位	日本	韓国	米国	国名 メキシコ	スペイン	英国	ドイツ
1	人間関係 24.4%	達成感の欠如 21.0%	達成感の欠如 32.1%	達成感の欠如 40.7%	孤独 27.4%	達成感の欠如 38.5%	達成感の欠如 32.0%
2	仕事 13.4%	不幸な感情 16.1%	人間関係 12.8%	世界, 他者の不幸 20.4%	達成感の欠如 21.7%	不幸な感情 14.7%	不幸な感情 18.6%
3	達成感の欠如 12.6%	人間関係 16.1%	不幸な感情, 不快 11.9%	家族 13.0%	重要な他者 17.9%	人間関係 13.8%	家族 17.5%
4	無力感 11.0%	家族 13.7%	孤独 11.0%	孤独 9.3%	不幸な出来事 15.1%	孤独 13.8%	不幸な出来事 12.4%
5	抽象化された他者 10.2%	経済的問題 12.9%	不幸な出来事 11.0%	不幸な感情 9.3%	人間関係 13.2%	ストレス 12.8%	健康 11.3%
6	孤独 8.7%	健康 10.5%	自己嫌悪 10.1%	不幸な出来事 8.3%	抽象化された他者 7.6%	不幸な出来事 11.9%	人間関係 8.3%
7	健康 8.7%	孤独 8.9%	仕事 9.2%	社会の不正義 6.5%	不幸な感情 6.6%	仕事 9.2%	抽象化された他者 7.2%

注) 各コーディング・ワードの百分率は、各国の全回答数の中での出現率を示す

の欠如」は、不幸と感じる原因の3位(12.6%)に位置するものの、その出現率は他国より少なく、メキシコの約3分の1以下、韓国の約半分であった。

日本では、不幸福感の原因としてもっとも多く頻出しているコーディング・ワードは「人間関係」(24.4%)であった。もとのテキストを確認すると「うまくいかない」「はめられる」「傷つけられる」「見放される」など実に多彩な内包があり、人間関係のトラブルに関して多くの表現語彙が用いられ、それを敏感に感じていることがわかる。「人間関係」は、韓国で16.1%、米国で12.1%、英国で13.8%出現しているが、これらは「家族」

や「重要な他者」と共起することが多かった。これに対して日本では、「幸福感」のときと同じく「抽象化された他者」(5位, 10.2%)と共起することが多かった。すなわち、家族や大切な他者ではなく、「人」や「他人」といった一般化された他者との関係として出現していた。

「不幸な感情」は、「～して辛い気持ちになったとき」「～して悲しくなったとき」という回答のように、何らかの出来事や対象に対して、気がふさいだり、恐れや怒りを感じたり、悲しみを感じたりするという、自分の感情状態を自覚し、それを介した不幸福感の認識である。韓国(2位, 16.1%)、米国(3位, 11.9%)、英国(2位, 14.7%)、

ドイツ（2位、18.6%）において、それは比較的目標立った「不幸感」の要因とされている。これに対して、日本では8位（7.9%）、スペインでは7位（6.6%）と、低いのが特徴的であった。

・コーディング・ワードの頻出をもとにした解釈
幸福感と不幸感とを併せて解釈すると次のようなことが浮かび上がってくる。まず、幸福を感じるときと、不幸を感じるときとは、そこに寄与している諸領域の重み付けが、両者のあいだで異なっているということである。幸福感を与えるものとしては、「生命感」に該当する他者とのつながりが多く挙げられるのに対して、不幸感を与えるものとしては、「達成感」の欠如が第一に挙げられる国が多かった。このように、幸福感の形成にもっとも重要と感じられる要因と、不幸感の形成にもっとも影響を与える要因とは、異なっていることが見て取れる。

国際比較という観点からみるならば、日本の幸福感、不幸感の規定要因として挙げられるものは、他国に比べ特徴的な様相を示している。第一の特徴は、他者とのつながりに関連する語が、幸福感でも不幸感でも、とりわけ多く挙げられていたことである。他者とのつながりといっても、幸福感の場合は他者と単に共在するだけでなく、他者と活動を共有していることが重要であった。これは、韓国の場合も同様であった。日本と韓国では、個別の人間同士がお互いのバウンダリーを守りつつ共にいるというより、両者が同じ活動や対象を共有することが、幸福をもたらす「つながり」を感じるために重要であると解釈できるであろう。日本の第二の特徴は、他者といえども、幸福感、不幸感のいずれにおいても、特定の他者ばかりでなく、「人」という一般化された他者との関係が重視されているという点である。これは韓国には見られない特徴であった。

幸福感の文化間比較に関するこれまでの研究では、北米－西欧文化圏での個人の達成や自尊感情との関連が重要であるのに対して、相互依存的自己感の優位な東アジア文化圏では、社会関係との調和が幸福感の規定要因として重要であるという、多くの調査に共通してみられる安定した結果がある（例えば Uchida, Norasakkunkit, & Kitayama, 2004 のレビューを参照）。今回の調査の結果を、

それらの知見と比較するとどうであろうか。まず、「幸福感」の要因よりも「不幸感」の要因のほうが、それらの知見とうまく適合していることがわかる。「幸福感」の要因は、北米－西欧文化圏、東アジア文化圏にかかわらず、いずれの国においても、他者とのつながり、すなわち「社会関係との調和」がもっとも重視されていた。これに対して「不幸感」の要因は、日本では、「人間関係」が上位に位置し、北米－西欧文化圏の国々では「達成感の欠如」が上位に挙げられているという、これまでの比較文化的な研究知見と一致する結果が出ていた。しかしながら、日本と同じ東アジア文化圏に位置していても、韓国では「達成感の欠如」が不幸感の最重要要因である。また、「不幸な感情」というコーディング・ワードは、自己の感情状態の認知や自覚であり、自分が「個」であることを意識させると考えられるが、これも北米－西欧文化圏ばかりでなく韓国においても頻出していた。従って、北米－西欧文化圏と東アジア文化圏とを対比させるのみでは、幸福感の文化間比較のフレームワークとしては不十分であることが窺える。さらにここに、北米－西欧文化圏と幸福感・不幸感の規定要因が類似していたメキシコ（中米）の結果、あるいは、他者とのつながりが幸福感でも不幸感でも最重視されており、むしろ日本に近い印象を与えるスペイン（南欧）の結果をも含めて包括的に説明しようとするならば、詳細な文化比較のパースペクティブが必要となるであろう。

共起ネットワークによる分析

7カ国すべてについて、「幸福を感じる」と「不幸を感じる」とそれぞれについて、コーディング・ワードの共起ネットワーク図を作成した。このことにより、どのコーディング・ワードどうしが共起する確率が高いか、すなわち、相互のコーディング・ワードの結びつきについて分析することが可能となる。なお分析対象としたサンプル数の少なさを考慮して、共起ネットワーク図は、1回でも共起が見られたコーディング・ワードを含めて作成した。

本論では紙幅の都合上、7カ国全体の結果を述べるのではなく、日本を中心とした国際比較をおこなう際に意味深い結果および特徴的な結果の中

心に述べる。図1以降で示されるように共起ネットワーク図において、コーディング・ワードは丸で示されている。丸が大きいほど出現頻度が高いことを意味している。また、赤色のものが最も中心性が高く、ピンク、白、薄灰色、の順に低くなり、最も中心性が低いのが灰色である。中心性が高いほど、そのコーディング・ワードが他の多くのコーディング・ワードと共起しながら出現することが多いことを示している。また、共起ネットワーク図でコーディング・ワードどうしを結ぶ直線は、それらの語の共起性を表し、この線が太いほど共起性が高いことを意味する。コーディング・ワードどうしの距離は、MDSと異なり特に意味をもたない。

日本の特徴として、図1に示すように幸福感においては、「好きなことをする、自由」がもっとも中心性が高く、かつ頻出していた。既に先の分析で示したのと同じく、「重要な他者」(友人、恋人)あるいは「抽象化された他者」(人、誰か)と活動を共にするという結びつきが強い(共起している)ことがわかる。また、「抽象化された他

者」も次に中心性が高く、「良好な人間関係を保つ」ということとの共起が強く、これも先に分析した日本の特徴がはっきりと出ていた。すなわち、幸福感の中心的領域には、重要な他者や一般化された他者と良好な関係をもち、何かをおこなう、ということが存在していることがわかる。不幸感に関しては、図2に示すように、「人間関係」が頻出し、かつ中心性が高かったが、これも先述した日本の特徴をはっきりと示している。「人間関係」は特に「抽象化された他者」との結びつきが強く「人からひどい扱いをうける」「人とうまくいかない」といった例のように、特定の誰ということではなく、世間一般の人との人間関係において不幸感をもつことが多いということがわかる。また、「人間関係」と「無力感」が共起しているのも特徴的であり、これも他の国には見られないものであった。また、頻出コーディング・ワードでは、目立たなかった「不幸な感情」が中心性の強い語として出てきているのが特徴的であり、そのような「個」の感情への自覚的な捉え方を中心とする認知をもつ人々も存在していることを示し

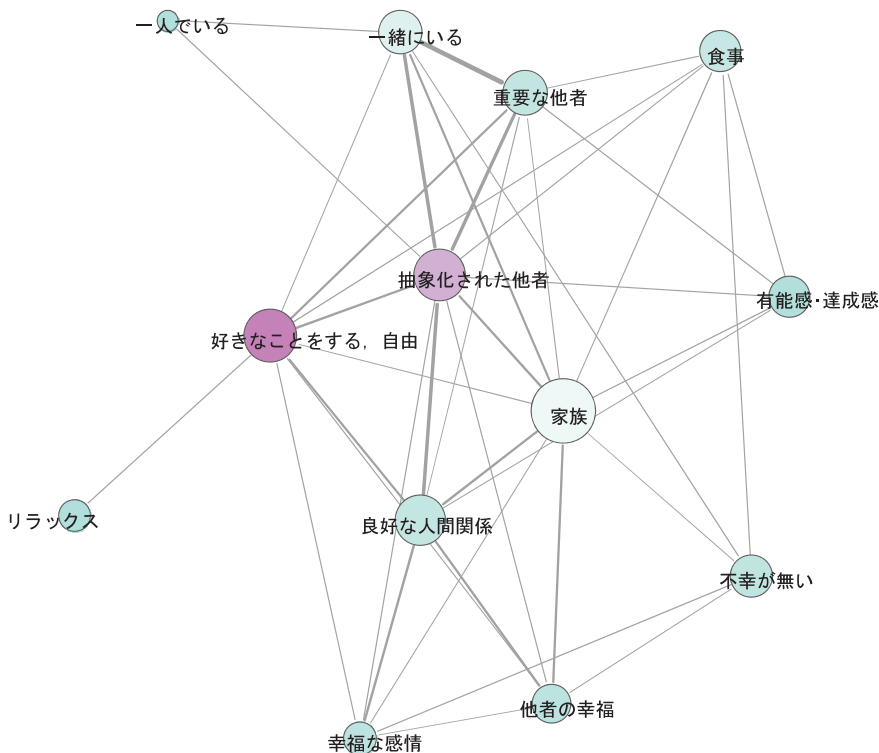


図1 日本「幸福と感じるとき」共起ネットワーク

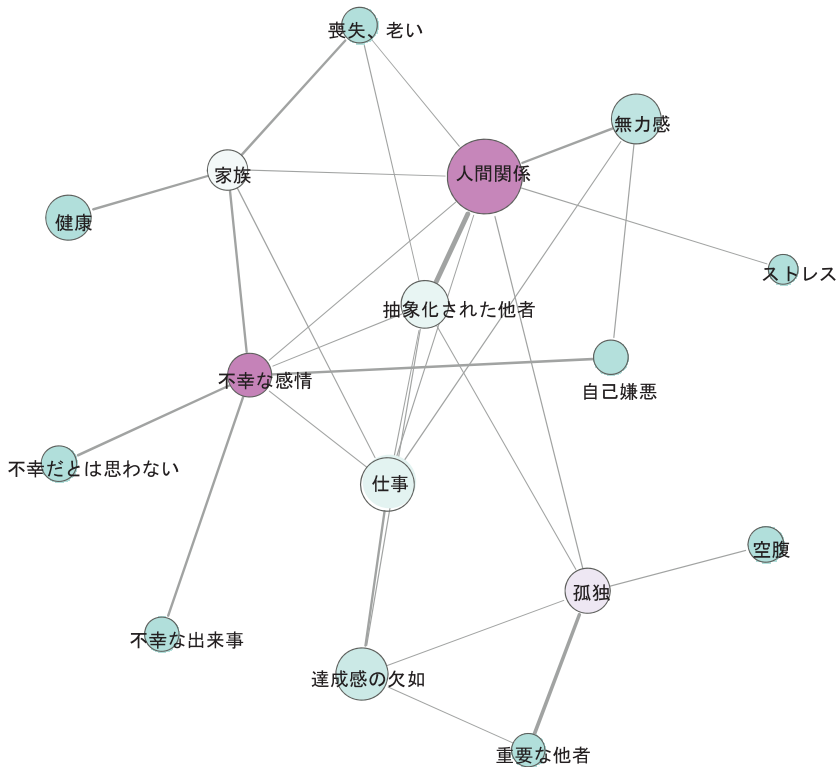


図2 日本「不幸を感じる時」共起ネットワーク

ている。

韓国では、「幸福を感じる時」においては、「家族」の中心性が高く、「一緒にいる」「好きなことをする」「幸福な感情」などと強く結びついていた（図3）。「好きなことを」を他者とおこなうことが重要なのは日本と同様であるが、韓国は「家族」と特に結びつきが強いのが特徴的であった。なお、日本において重要であった「良好な人間関係」のコーディング・ワードは抽出されていない。また「達成感」も頻出し中心性も高い。日本で「達成感」は中心性が弱く出現頻度も低かったことと大きく異なっている。「不幸を感じる時」は、図4に示すように「達成感の欠如」が頻出し中心性も高かった。これも、日本において「達成感の欠如」が周辺的な位置にあったことと大きく異なっている。「人間関係」が比較的中心性が強いのは日本と同様の傾向であるが、日本のように一般化された他者とは結びついていなかった。

米国において「幸福を感じる時」は図5に示すように、「重要な他者」（友人・恋人）と「一緒

にいる」ということが、もっとも中心的な領域に位置しており、「達成感」はそれほど目立たなかった。それに対して、「不幸を感じる時」では、図6に示すように、「達成感の欠如」がもっとも中心性が高く頻出していた。しかも、「達成感の欠如」は、「自己嫌悪」という「自己評価」と比較的強く関連しており、これは他の国には見られない特徴であった。Diener and Diener (1995) などの先行研究においても、米国では「達成感」と「自己評価」とが関連していることが示されている。しかしながら、本研究では、「達成感があると自己評価が上がる」というよりも、「達成感が欠如すると自己評価が下がる」という関係のほうが強いことが示唆される。

図の掲載は省略するが、メキシコと英国においては、「幸福を感じる時」の中心的な要因は、「家族や友人等とのつながり」と「達成感」という2つに中心性が存在していた。「不幸を感じる時」も同じく、家族や重要な他者に「不幸な出来事」が生じることと、「達成感の欠如」の2つに中心性が分かれていた。これに対してスペイン

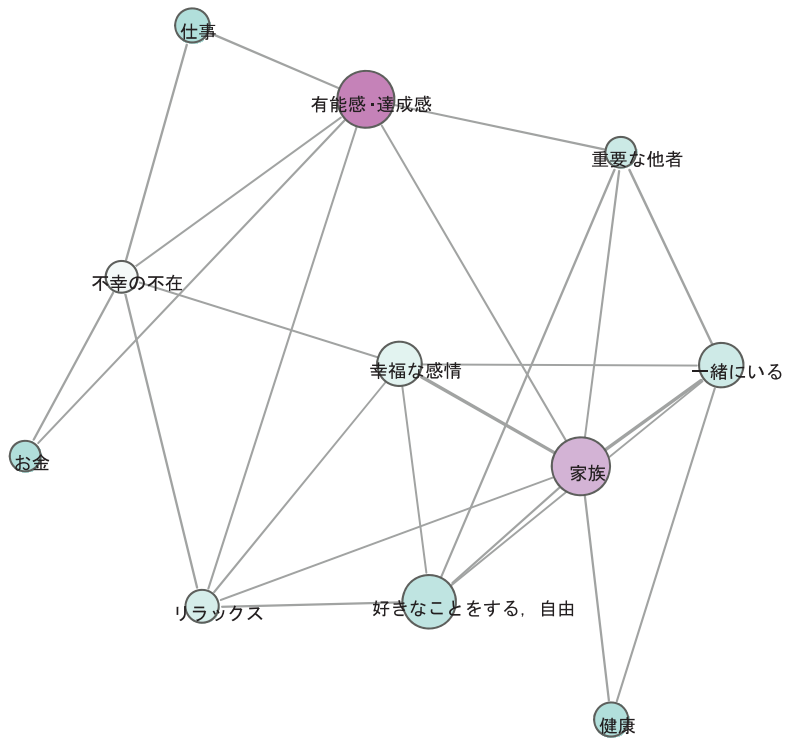


図3 韓国「幸福を感じる時」共起ネットワーク

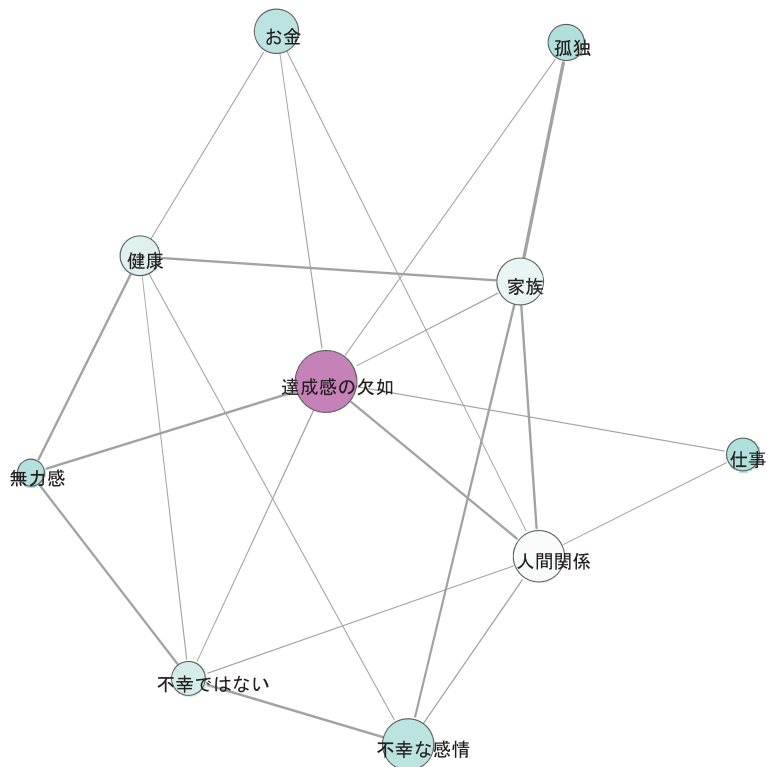


図4 韓国「不幸を感じる時」共起ネットワーク

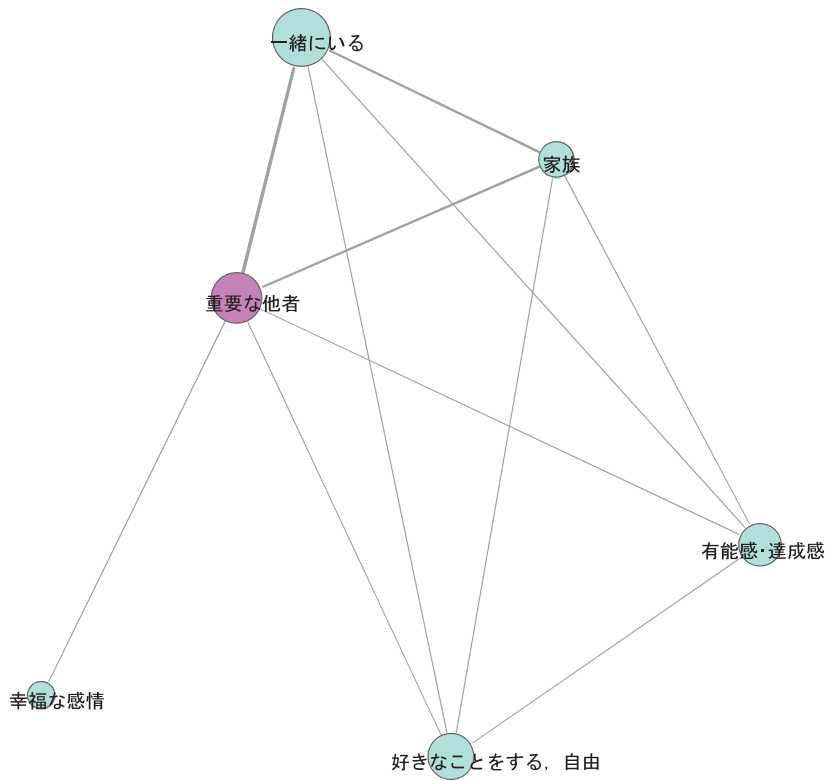


図5 米国「幸福を感じる時」共起ネットワーク

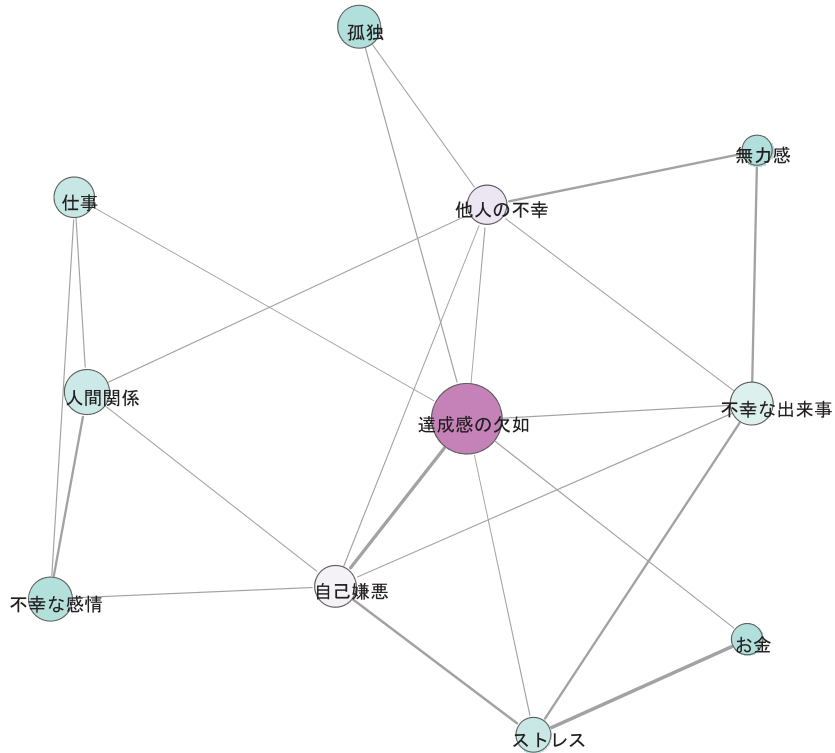


図6 米国「不幸を感じる時」共起ネットワーク

では、不幸感を感じる時は図7に示すように、「重要な他者」や「抽象化された他者」に「不幸な出来事」が生じることに中心性があるという特徴があった。ドイツにおいて「不幸を感じる時」は、図8に示すように「不幸な感情」がもっとも中心性が高く、他のほとんどのキーワードと結びついているのが特徴である。状況に対して否定的感情を感じている自分自身を対象化して認識する傾向があることがわかる。

カテゴリーコーディングによる分析

【分類カテゴリーとコーディングの方法】

Q3「私にとって幸福とは～～である」に対する回答、すなわち個人にとっての幸福の定義もしくは「幸福観」に関しては、カテゴリーコーディングをおこなうことで分析した。まず日本のデータを対象に、Ryff (1989) の well-being の理論的定義等を参考にしながら、筆者と今回の分析に携わった補助者一名が協議して分類カテゴリーを生成した。その際、カテゴリーの数は、十分にカテ

ゴリー間の差異がありつつ煩雑となりすぎない7個前後になるようにした。こうして日本のデータをもとに仮に生成されたコーディング・ルールを、他の国に当てはめ確認をおこない、より包括的なルールとなるよう修正を加えていった。その結果、最終的に表5に示すような、各国共通の分類カテゴリーおよびコーディング・ルールが作成された。

この分類カテゴリーに則して、筆者と補助者一名が、データを独立に20個ずつコーディングし、不一致であったものに関しては協議しコーディング・ルールの理解を深め、必要があればコーディング・ルールの明細化をおこなっていった。この過程を5回繰り返した後、一致率が90%を超え安定することが確認されたので、残りのデータは別個にコーディングをおこなった。コーディングに迷ったものは、協議して決定した。なお、今回のカテゴリーコーディングによる分析では、韓国 の Q3 の翻訳が未完了であるため欠損している。

【結果と解釈】

「幸福観」のコーディングされた結果を、各国

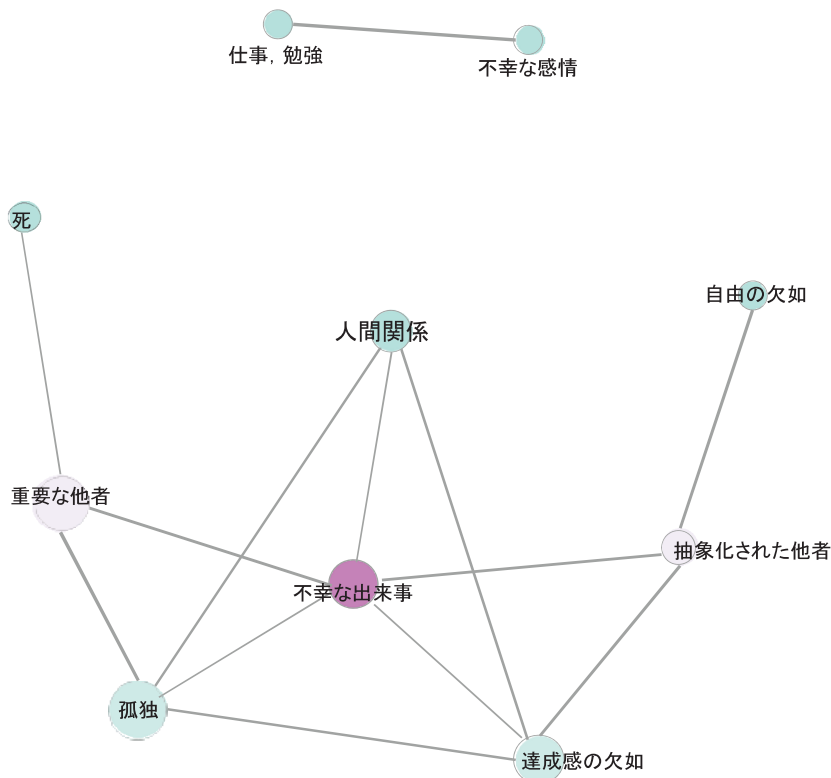


図7 ス페인「不幸を感じる時」共起ネットワーク

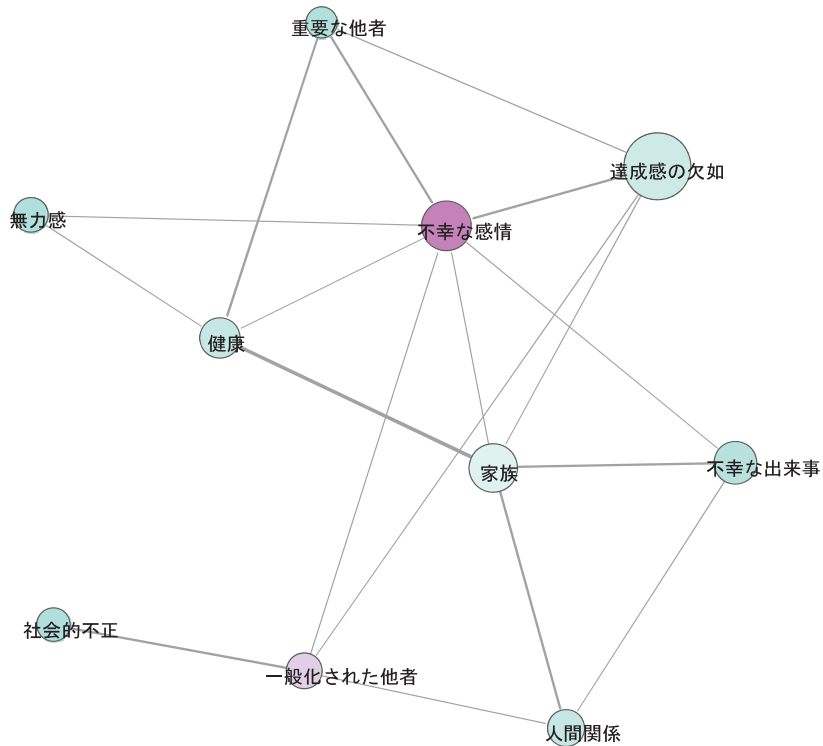


図8 ドイツ「不幸を感じる時」共起ネットワーク

表5 「幸福の定義」分類カテゴリーと分類基準

カテゴリー	分類基準と含まれる語
達成	自分が意図したことを成し遂げること，世界に対する能動性 例) 夢見た生活を送る，人生の成功，好奇心を満たせる行動がとれた
自由	自分の好むこと，思うことが自律的・自由にできる。生きることを楽しむ 例) 人生を楽しむ，好きなことをする，自由に生きる
共存	他者や世界との調和，交流，他者や世界の幸福，他者から愛されることが評価されることが，他者への献身など 例) 家族，愛，他人によりことをする，調和して生きる，周囲が幸福である
感情	嬉しい，楽しい，満足，充実している，といった感情やその表出 例) 微笑むこと，笑顔でいられる，気分がよい，幸せな心，充実していること
平安	不幸や苦痛，心配，病といったネガティブなものがいない状態 例) 心配ごとがないこと，ゆっくりすごせる，リラックス，平和，おだやかな毎日，普通なこと
態度	幸福の捉え方に対して自分の考え，態度，認識を重視したり，幸福に対して一定の信念などが表明されているもの 例) 全てを受け入れる，最大限に生きる，自分の人生を愛する，気持ちしだい，毎日の積み重ね，感謝をすると得られる
観念	「幸福」の同義語への言い換え，抽象的定義となり，回答者の主観的関わりや意見表明がないもの 例) 不幸ではない，思考状態，幸福，定義できない，人生，全て，夢，そのうち手に入る，遠い
経済	経済的安定，財産や富の獲得。ただし「生活の心配をしないいいこと」など，最低限の条件は，「平安」に分類する 例) 金，資産，経済的に裕福
不明	「なし」「わからない」など

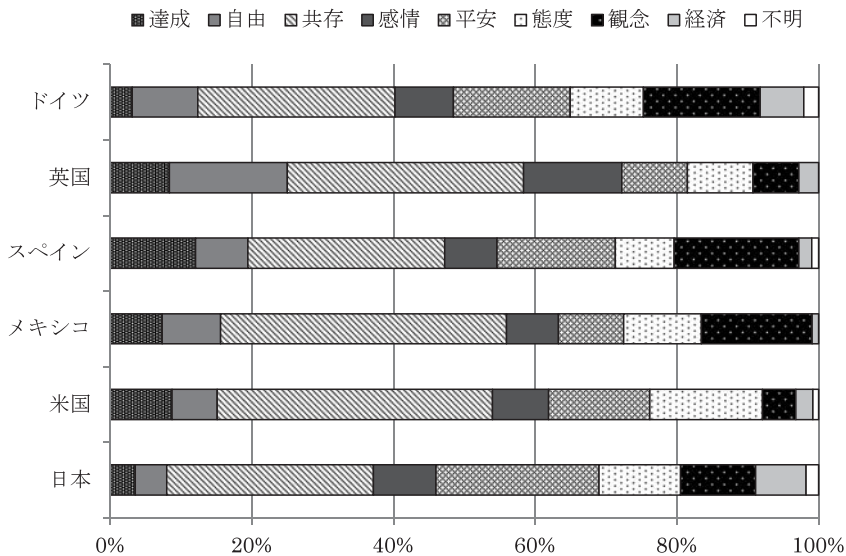


図9 Q3「私にとって幸福とは～～」に対する回答のカテゴリーコーディング結果 (全回答数に対する百分率, 各国別)

の回答数全体に占める百分率で示したものが図9である。7カ国それぞれに9つの変数をもつデータであるので、これをもとに国際比較をおこなうためには、全体を俯瞰して印象的な差異に着目しておこなうという解釈方法を採用することとした。この手法では、その解釈は主観性や恣意性を伴うおそれがあり、また、説明のために外挿的に他の研究・調査の結果や文化論などを参照することもある。したがって、十分な根拠をもって主張された結果というより、あくまでも今後の文化比較調査のための新たな観点の可能性を提示する仮説生成的なものであることを、あらかじめ断っておきたい。

さて図9をみると、他者との共存や調和を優先する指向である「共存」は、いずれの国においても「幸福観」のもっとも支配的な要因であることがわかる。特にメキシコとアメリカでは回答の40%を占めている。これに対して、ドイツ、スペイン、日本では30%程度にとどまっている。ここに有意差が読めるかどうかは難しく、たとえば差があったとしても、その差をもたらし各国に共通する要因を、十分に根拠をもって挙げることはできないであろう。各国がそれぞれ異なる要因によって、そのような現象が生じている可能性も大きい。したがって本論では、結果から実証的に示される主張というより、これらの結果を参照することでもたらされる、幸福感の文化間比較研究の

パースペクティブへのリフレクション、あるいは複数の仮説可能性を示唆することとなるであろう。

たとえば、スペインと日本は、Q1「幸福感」およびQ2「不幸福感」の回答では、他者との関係が他国より重要視されていた国である。また、この2つの国の回答者の属性情報によると、他国よりも同居率が多い（独居率が少ない）という特徴があった。このように、具体的な現実においては、「共存」が重要な国である。しかし、Q3のような自分にとっての「幸福観」や「幸福の定義」では、それにあまり言及されていない。これは「幸福観」では、自分の現況に関わるということより、希望や意図に関わるやや抽象的な回答が得られるためであるとも考えられる。あるいは、スペインと日本では、他者との共存はすでに現実的に存在している、様々な具体的な出来事や配慮に満ちたものであり、「幸福観」のような抽象的理想には、むしろ反映されないという解釈もありうる。このように、具体的な幸福感や不幸福感の要因/状況と、幸福「観」や意見を構成する要素とが異なると考えられる例は、後述するように他のカテゴリーにも見られた。

金銭的な獲得や充足を自分にとっての幸福だと定義する「経済」は、日本、ドイツ、英国において多く見られ、メキシコで少なくなっているのが特徴的である。OECDの提供する2010年の調査によれば、国民1人あたりのGDPは、日本、ド

イッ、英国はそれぞれメキシコの約 2.5 倍であり、米国は約 3 倍である。GDP の成長率は、2008 年から 2010 年の 3 年間では、日本と英国はマイナス成長、ドイツとメキシコはほぼ横ばいである (OECD, 2011)。このように、経済的な裕福さや成長率の指標と、今回の結果との整合的な関連は見いだしにくい。ひとつの可能性としては、社会的・経済的階層差の大きいメキシコでは、インターネットを使用する人々は比較的裕福な層であり、経済的な獲得や充足が「幸福感」として表立って出てきていないということも考えられる。

目標を達成したり、やりがいのあることを行うといった「達成」を「幸福の定義」とする比率は、日本とドイツにおいて他国より低かった。この結果は、日本の場合は、「Q1 幸福感」「Q2 不幸福感」での結果の傾向と一致していた。しかしドイツでは「達成」は、「Q1 幸福感」においては他国よりも出現率が高く、「Q2 不幸福感」においても最も重要な領域であったので、逆の結果が出たこととなる。このことは、「幸福感」「不幸福感」の具体的な要因と「幸福」に対する意見や態度との関連性は、決して一様ではなく、両者を単純に同一視することはできないということを示している。すなわち、両者のあいだにどのような要因がどのように作用するのかは、国別に異なっている可能性があり、幸福感の国際比較においては、すべての国を同じ構造モデルで説明するばかりでなく、それぞれの国において異なるモデルが必要になってくることも示唆されるであろう。

生活が脅かされることがなく平穏無事に過ぎていくことを幸福の定義とする「平安」は、日本において他国より比率が高く、メキシコと英国において低くなっていた。OECD の調査 (OECD, 2009) によると、犯罪被害者の対人口比は、日本では 2005 年では 10% に満たず (そのうち半分は自転車盗難被害である)、日本はもっとも社会的な安全度が高い国のひとつである。逆に、メキシコと英国は、今回の分析対象国の中ではもっとも犯罪被害者の対人口比が多い (メキシコ 18.7%) (英国 21.0%)。この矛盾した結果に対する一つの仮説は、日本では、「平安」は望めば得られるものであり、メキシコと英国では望んでも得にくいゆえ、幸福観は別の領域が意味をもってくるのではないかというものである。あるいは、「平安」

はリスクを冒さないということも含意するので、日本の場合は他国よりリスクを冒さず平安であることが重視され、メキシコや英国においては、そうではないということを示しているとも考えられる。いずれにしても、「幸福観」の形成には、複雑な要因がかかわっていることを窺わせる。

幸福は、自分の態度や行動、考え方に依るところが大きいとする「態度」は、米国において他国よりも比率が高くなっている。これは、「幸福」に対する主体の認識の能動性 (たとえ状況自体は変わらなくても) を強調するものである。前向きに肯定的意味を見いだして生きるというポジティブな指向性は、米国に特徴的であることが、Ehrenreich (2008) などで指摘されているが、この特徴と無縁ではあるまい。しかし、事象に対して肯定的意味を見いだせず「不幸」だと感じてしまうとき、それが自己の認識や態度に帰属させられるならば、自尊感情の低下と結びつくのだと推測される。幸福の自分なりの主観的な色付けをしない「観念」 (たとえば「幸福は毎日の生活」「あらゆるもの」などの回答)、は、米国において他国よりも出現率が低い、これは、幸福の抽象的定義は「態度」が多く占めているということと対応しているものである。

ま と め

本論では、幸福感の国際比較調査の SCT の分析を通して、幸福と感ずるとき、不幸と感ずるとき、幸福の定義に関する文化比較をおこなった。各国の幸福感の形成に関する諸要因の様相が個別的に示されるとともに、各国に共通する幸福感の要因として、他者とのつながりや共存といった「生命感」に関わる領域が重要であることが示された。これに対して「有能感」「達成感」は、各国で重要度が異なっていた。また、日本を中心とした文化間比較の結果として、日本では一般化された他者の意識がきわめて重要であること、日本や韓国では他者と共に存在することそのものよりも、共に活動を共有することが幸福を感じるために重視される等の結果が示された。この結果は、他者とのつながりである「生命感」の実相に関して、新たな知見を付け加えるものとなってであろう。さらに本研究では、幸福感について考えてい

く際の私たちのパースペクティブに対して、幸福感と不幸感を構成する要因が異なること、また幸福感と幸福観とは構造が異なること、西欧－東アジアといった文化比較の対比軸以外にも多くのバリエーションがありうることを示すことができた。

今後は、さらに分析対象国を増やし、また、分析対象とするデータ数も増やすことで、本論で提示した仮説をさらに精緻化させていきたい。性差、年齢群などの回答者の属性、あるいは数量的データによる指標等を外的変数として考慮した分析をおこなうことで、数量的分析との関連を示すことも望まれる。

文 献

- Diener, E. & Diener, M. (1995). Cross cultural correlates of life satisfaction and self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 653-663.
- Diener, E. (2000). Subjective well-being: The science of happiness and a proposal for a national index. *American Psychologist*, 55, 34-43.
- Ehrenreich, B. (2008). *Bright-sided: How the Relentless Promotion of Positive Thinking Has Undermined America*. Metropolitan Books.
- OECD (2009). Factbook 2009.
http://www.oecd-ilibrary.org/economics/oecd-factbook-2009_factbook-2009-en (2012年3月5日現在).
- OECD (2011). Factbook 2011-2012.
http://www.oecd-ilibrary.org/economics/oecd-factbook_18147364 (2012年3月5日現在).
- Ryff, C. D. (1989). Happiness is everything, or is it?: Explorations on the meaning of psychological well-being. *Journal of Personality & Social Psychology*, 57, 1069-1081.
- Uchida, Y., Norasakkunkit, V. & Kitayama, S. (2004). Cultural constructions of happiness: Theory and empirical evidence. *Journal of Happiness Studies*, 5, 223-239.

— 2012. 1. 4 受稿, 2012. 4. 13 受理 —